

釧路町立富原小学校 フィールド学習 実施内容

《概要》

[日程] 2019年11月19日(火)

[参加者] 4年生児童85名

[講師・案内] 環境省 矢部自然保護官

山本・安田(公益財団法人 北海道環境財団)

[フィールド学習の目的]

・釧路川の蛇行の様子と浸食状況を観察し、環境的な課題の側面から釧路湿原を見つめ直し、保全活動の意義を実感する。

[実施プログラムの概要]

9:42 二本松展望地到着・オリエンテーション

9:48 展望地および二本松橋から釧路川、釧路湿原の観察

11:20 中久著呂農村環境改善センターにて昼食休憩

12:15 久著呂川の浸食状況、取組みの観察

13:20 中久著呂農村環境改善センター到着・フィールド学習終了

《実施内容(記録)》

■オリエンテーション(9:42)

○挨拶(環境省 矢部自然保護官)

○スケジュールの確認(北海道環境財団 山本)



■展望地および二本松橋から釧路川、釧路湿原の観察(9:48)

○砂丘の上から釧路湿原を観察する

目の前にあるものが、皆さんがこれまで勉強してきた釧路湿原。そして目の前の大きな川が釧路川。おおよそ下流から20kmくらい上流側に来た場所になる。これまで見てきた湿原と違いはあるだろうか。(木が多い、緑が少ないなどの子ども達の声) 緑がかなり少なくなった。以前に皆さんが湿原を訪れたのは温かい夏の時期だったかと思う。今は葉も枯れて、木や草は



冬になる準備をしている。湿原を見ると、木が生えているところ、黄土色の部分がある。この黄土色の場所には、ヨシという背丈が2mくらいの植物が生えている場所。木が生えている場

所にあるのはハンノキという1種類。木が多く生えている場所はどんなところだろうか。（川の近くと子ども達の声）川の近くは大きな木が多いが、湿原の真ん中の方は気が少ない。木が生えている場所には、多いところと少ないところがあるということを覚えておいてもらいたい。

皆さんが見ているこの釧路湿原は、日本で一番大きい湿原。今日は北の方から渡ってきたオオワシやオジロワシが多く飛んでいる。野生生物保護センターでも皆さんは見たと思うが、目の前にいるのは、自然の鳥。このオオワシたちは冬になったので釧路湿原に渡ってきた。それまでは、もっと北の寒いところに住んでいるが、ここで冬を越して春に北に戻っていく渡り



鳥。釧路湿原には他にもたくさんの生き物が住んでおり、例えば、昔絶滅したと考えられていたタンチョウは、目の前に見える岬のさらに奥、湿原の本当に奥の方で、かろうじて生きていた数十羽が100年程前に発見され、現在のように数が増えてきた。釧路湿原だからこそ住むことができる生き物が数多くいる。

黄土色に見えているヨシなどの湿原ならではの植物が生えており、例えばタンチョウはこのヨシを使って巣を作ったり、ヨシ原に隠れながら子育てをしている。先ほどお話したように、川の近くには、木が生えていたり、木が少ないところがあったりと、水や土、栄養状態によって生えている植物も変わっている。

○林の中から釧路川の大きな蛇行を観察する

くねくねと曲がりながら流れているのが自然の川。どのような形に見えるだろうか。（ネッシー、へびみたいと子ども達の声）釧路川の上流の方は、くねくねと形を変えながら湿原の横、中を流れている。自然の川はこのようにくねくねと曲がっているということが、今日の大切なポイント。先ほどお話したように、川の横には木が生えているが、川から離れた奥の方は木が生えていない。このように、川は栄養がある水や土を運んでいるんだということがわかるかと思う。釧路川も水が多い時、少ない時があり、水が多い時には水の勢いも強い。砂場で水を一気に流すといろいろなところに流れ、水が流れた跡がつくと思う。釧路川も水が多い時には土を削って流れていき、このように形になった。



○二本松橋に向かう丘陵の際の道で森の木と湿原の木の違いを観察する

斜面の方を見ると、湿原では見られない木が生えている。森の方には、皆が学校で植えたようなミズナラなどの木が生えている。こうした山に生えている木は湿原の中では育つことが難

しく、湿原の周りの林で水を守っている。湿原の周りには、湿原とはまた違った様々な植物が生えており、それぞれの植物には生きていきやすい場所がある。

○シカの食痕を観察する

この木の枝の皮はボロボロになっているが、誰がやったのかわかるだろうか。（台風、シカ、クマと子ども達の声）これはシカがかじった跡。こういう木の皮も冬になって餌が少なくなってくると食べ始める。シカも餌が少ない冬にはいろいろなものを食べながら頑張っている。

○二本松橋から釧路川を観察する

先ほど上から見たくねくねした釧路川が目の前に流れている川。皆さんは、右手の崖の上にある林の中から釧路川を見ていた。



■久著呂川の浸食状況、取組みの観察（12:15）

○活動前のオリエンテーション

先ほどは釧路川を見た。午後は釧路川に流れ込んでいる支流の久著呂川という場所にやってきた。午前中に見た釧路川からさらに北の方、上流に場所になる。この水がいずれは釧路川に合流するが、合流するまでの間に湿原をくねくねしながら流れていく。川を見ると、先ほど見た釧路川と色々なところが違うと思う。午後は、何が違うのかを観察しながら勉強をしていく。



この久著呂川は自然の川と言えるかという部分も見てもらいたい。釧路湿原があることで良いことが多くあるが、その湿原には困ったことも起きているというお話をこれまでもしてきた。この川は実際に困ったことが起きている場所の1つで、その対策も行っている。何が困っていて、どのようなことをしているのか、先ほどの釧路川と何が違うのかを良く見ながら、いろいろな発見をしてもらいたい。

○浸食が起こる前の久著呂川の観察

（ここから、2グループに分かれて川の様子を観察）

目の前に流れる川は何もしていない川かと言うと、そうではなく、水の力で川が削れないように、水が多い時に溢れないように、何十年も前に工事をしている。その工事をした後の川の状態が、目の前に見える川。川の周りには木が生えていて、水面と木が生えている場所が近いということを覚えておいてもらいたい。

○浸食が進んできた様子を昔の写真と比べる

ここまで歩いてくる間に、皆が立っている場所と川の水面の高さがどんどん遠くなってきたのがわかるだろうか。本当は、最初に見た川と同じような風景だったはずだが、川の水面がかなり下にある。ここでは、変化してきた様子と目の前の風景とを見比べてもらって、変わってきたんだなということを確認してほしい。（平成7年から平成24年までに、この場所を撮影



した写真を見る。）写真を見ると、平成7年頃は、今日最初に見た川の様子と同じような川だったことがわかると思うが、徐々に川の底や両岸のコンクリートが壊れていったことが写真からわかると思う。元々がこうした風景だったわけではないということを知っておいてもらいたい。このように川を変えてきたのは水の力と考えられており、雪解け水や大雨の後に川の水が増えた時に、川底や両岸をどんどん削り、本来の地面から4m程も川底が削られた。このまま削られていっては良くないということで、目の前に見えるように、がっちりと両岸、川底をコンクリートで囲んでいる。

○浸食された岸の崖が見える場所

現在は浸食を防ぐための取組みの1つとして、川の幅を広げたが、その工事が入る前は、川の形はV字になっていて、川の底には石もなくなっていた。川の幅を広げたことで、川底の石もここで溜まるようになり、今では川底に多く石が見られる。こうした石が水の力で川底が削られていくことを防いでいる。また、石に様々な生き物が住んでいるので、これを餌にする魚も住むことができ、魚にとって休む場所、隠れる場所にもなる。石がほとんど見られなかった時には、魚もすごく少なくなったと聞いている。



岸を見ると崖のようになっていて、木が生えている場所と水面の距離を比べると4m~5mはあることがわかると思う。削られていく前は、木が生えている場所の近くに水面があった。崖をよく見ると、石がかたまって見えるところがある。この石は角が丸く、元々は川の中にあった石。どうして崖に川の中にあった石が混ざっているのかわかるだろうか。（上から落ちてきたと子ども達の声）水に削られて崖のようになっていて、崖の中の石は元々地面に埋まっていたもので、上から落ちてきたものではない。最初に、数十年前に自然の川を工事して洪水が起らないようにしたとお話したが、あの石は、その工事を行う前の川の跡。自然の川の形だった時に川底にあった石で、少しずつ離れた場所に石が集まって見えるところがあり、くねくねと曲がっていたことを想像してもらいたい。

ここで削られた土はどこまで運ばれるかわかるだろうか。最初に釧路湿原を通過して、釧路川に合流するというお話があったが、ここで削られた土は釧路湿原まで流れていき溜まる。すごい量が湿原に溜まったことがわかるかと思う。釧路湿原を守っていくためには、こうした土が多く湿原に流れ込まないようにすることも、とても大切になる。削られる原因として、くねくね曲がっていた川をまっすぐにしたこと、ここから少し下流で川の底の石をとっていたことなどが原因と聞いている。では、自然の川を工事したことが悪いのだろうか。自然の川のままで洪水が起こったりするため、それを防ぐために工事をしており、現在でも川の横にある畑は農家さんに使われている。農家さんやここに住む人たちが悪いわけではない。私たちが生活していくことと、湿原を守っていくことのバランスを考えていくことが大切になってくる。

○全体でのまとめの話

この久著呂川で削られた土は、釧路湿原まで流れ込んでいるということが、ここでの困っていることになる。これ以上土砂が入って来ないように、いろいろな工事を大人の人たちが行っており、その成果もあって、最初に見た川にあったような川底の石も下流に流れていかないくらいに環境が戻ってきている。どのくらい魚がいるか調査したところ、いろいろな魚が戻ってきていることも確認されている。湿原の困っていることについて対策を行い、その効果が少しずつ出てきている。



川に運ばれた土は、湿原のどこかに溜まっており、午前中に見たようなハンノキが多く生えるということが起こってくる。タンチョウが巣を作るために必要なヨシ原の環境がなくなったりということも起こってくる。こうしたことが起こらないように、どうしたら良いのかということをお大人たちは考えて取り組んでいるが、皆さんも出来ることが多くあると思うので、これからは考えていって欲しい。

質問：久著呂川のような問題になっている川は、どのくらいあるのか。

回答：土砂が流れ込んで問題になっている川は複数あるが、この川のように対策をしている川は3つ4つ程。湿原にはたくさんの川が流れており、最終的には釧路川に流れ込んでいる。そこにいくまでに、土を運んでしまい問題になっている川は多くある。

■中久著呂農村環境改善センター到着・フィールド学習終了（13：20）